

一段紐

哲学と文藝との抱合

金子馬治

第一

十九世紀のドイツ哲学——所謂ドイツ
 近代理想主義の哲学の一般文藝に詩歌詩
 類と非常の親密な関係を有し、互に抱合し
 補助し合ふ。歴史的にも他は例とせぬ。我
 たいは密接な親密な関係と保持したことは
 人にも餘り明白である。事変の如き。カ
 ン
 及ぶにテと並んで、
 ルダー及びルンペ
 リヒ・シュレ
 完全一致の
 出しよと方
 根本に於ては、
 主義は、
 ど事柄の
 事柄の



於て我々がドイツ文化の特殊な在り姿を
 の感に打ちたれど、その時、即ちこの言
 教が、藝術と哲学とを併合し、その言
 又け、哲学と藝術との基礎と成つて
 常教、哲学、藝術、本能的、文化の完
 全に統一し、宗教と成つて、その言
 入る、ト、其の人の、
 モ多量の、お時は、
 結、
 し、
 と、
 信、
 根、
 ハ、
 考、
 い、
 ん、
 が、

宗教の統一

4

TS 10 x 20

此の言は、
 不教の國を以て、
 其の言は、
 其の言は、
 其の言は、

詩人の哲学者たちへラフライトス也パル
 ヌニテス等ニ於て論議せられたる如く、
 此のラトシに於て最も顯著な事柄が
 此の如く。深遠な普遍又永遠の理想を
 手に於て具體的に拉し來たる所に藝術創造の
 意力が在り。所謂理解力 (Understanding) の
 故に哲学者は、甚しく藝術的創造の
 欠け、我々の本として其の及ぶと見
 出され。此の如く人生の普遍性も永遠性も
 殆ど全く缺けらる。 (幸に吾々の皮相とし

の理解し得ないものあり。
 エッソハルト哲学者の根本特徴は、主観の
 永遠を滅のさすめさ (Funkam) と観破した
 存する。主観の根本に無限の神の姿と親
 在する。主観の中は絶対乃至無限の光
 に在る。主観の中は絶対乃至無限の光
 認めるといふ如く、此の論議は、哲学者の
 の結果として断じられ支えらるる如く、
 此の如く此の場合には、特殊な藝術的
 命に哲学者の創見は、此の如く、
 一、蓋し彼の如く哲学者は、純粋に概念的
 乃至論理

此の如く哲学者

と成しつぬ。

第三

的のありは、常に直観的に詩的である。如
 多いからである。藝術の直観も詩の對象は常
 に内的生命である。就中叙詩の直観乃至創
 造は必然的に主観的。内生命に向はると行方
 い。エッパイルトの顯著な主観的傾向は、それ自
 体既に藝術的傾向を帯びてゐる。
 故にエッパイルトの常叙の基礎には、哲學と文
 藝と如木が介在せず、此は相抱合して其の地盤
 と成しつぬと解釋するに如出来ぬからである。
 多くは命令常叙の基礎には、藝術と哲學が一体

くに親本は心通ん心さ七文藝は特にかつト也
 たり此の雨文比は其の實地を如し合つ
 イト如くあり、者も其の實地を如し合つ
 たりこの格考と文藝との関係は甚どしくテリケ
 しん、フヒテの至親格考を教へぬ。此のあり
 ゲル、フヒマフテ、スム文藝の進歩の一大原因と
 興へると言はれ、現にフリードリヒ・シュレ
 ーゲル、フヒマフテ、スム文藝の進歩の一大原因と
 同、在るに二九也極度は、故に、フヒマフテ、
 親格考が、異常に深刻な影響を、近代の文藝に
 興へると言はれ、現にフリードリヒ・シュレ
 ゲル、フヒマフテ、スム文藝の進歩の一大原因と
 しん、フヒマフテ、スム文藝の進歩の一大原因と
 たりこの格考と文藝との関係は甚どしくテリケ
 イト如くあり、者も其の實地を如し合つ
 たり此の雨文比は其の實地を如し合つ
 くに親本は心通ん心さ七文藝は特にかつト也

試論的研究の結束とし、その中心を、
 全、その中心を、
 方、その中心を、
 下、その中心を、
 カ、その中心を、
 期、その中心を、
 義、その中心を、
 殊、その中心を、
 け、その中心を、
 試論的研究の結束とし、その中心を、
 全、その中心を、
 方、その中心を、
 下、その中心を、
 カ、その中心を、
 期、その中心を、
 義、その中心を、
 殊、その中心を、
 け、その中心を、
 試論的研究の結束とし、その中心を、
 全、その中心を、
 方、その中心を、
 下、その中心を、
 カ、その中心を、
 期、その中心を、
 義、その中心を、
 殊、その中心を、
 け、その中心を、

二とを我々にあつた外からいふ言の
 二羽。つたり詩也藝術は人生の最高生活に
 あり精神文化の最高峰なり。哲学とは斯
 くの人生の中樞乃至最高生活と教へるもの
 の最神龍を教へるもの。換言すれば、哲学は人生
 あり文藝心ありと解釋せんがなり。藝術
 と言へば、口マツクこと、正体は藝術至上主
 義に外ならずあり。
 同じ藝術至上主義の口マツクこと、哲学
 者にエリ。グロリアの理論也。藝術的創
 造は、直観のあり、一切の精神活
 動を調和し統一し、一切の創造を絶対錯
 神に外ならずあり。ニエリニグ、哲学は純然
 たる藝術至上主義のあり。
 斯くの藝術至上主義は、普通には、此類
 され、とほり、果てしなく、時り、絶えず、空想に
 出づるあり。人、一、ゲル、道徳也、政治也
 宗教的精神の発現と藝術、藝術、宗教、及、心、哲学也
 絶対精神の発現と藝術、藝術、宗教、及、心、哲学也

TS 10 x 20

即ち

22

No.

治的勢力と致し、彼等は、
 己入る如く人生の極致を
 一にせしむる人生觀も果
 老ぬと書入るものあり。哲
 教と、藝術と其の極致と
 可餘けいにて理想のあり
 無視するに等し。其の極
 致に墮するものあり。此
 極致論も若くは、華中の
 思想的人生觀の時代の一
 種貴い理

校